

地域コミュニティの 防災力

重川 希志依

連載 第5回

「2009年駿河湾地震とコミュニティ」



重川 希志依

1 建物の被害

昨年8月11日、駿河湾を震源とする地震が発生し、静岡県中西部と伊豆半島で最大震度6弱が観測されました。30年以上にわたり東海地震に備えてきた防災先進県の静岡ではありますが、震度6弱の地震を記録したのは、なんと65年ぶりのことでした。多くの静岡県民にとっては、生まれて初めて体験した大きな揺れだったわけです。私も勤務する大学が所在する静岡県富士市でこの地震を経験しました。

住宅の被害は県内全域で6,610棟（静岡県調査）

に達し、被害の半数以上は揺れの大きかった県中西部で発生しています（図1）。また被害の大半は、屋根の棟瓦のずれや瓦の落下などにとどまり、建物本体に大きな影響を及ぼすような被害は発生しませんでした。何人かの被災者にお話を聞いてみると、屋根瓦の修繕には結構な金額を要しており、100万円～200万円の出費があったという回答が多かったことに驚きました。さらに、職人さんの人数が足りず順番待ちの状況で、今現在も、修理ができずにブルーシートをかけてしのいでいる被災者も少なくありません。

2 けが人の発生

一方地震による人的被害に関しては、1名の方が亡くなり、237名の負傷が発生しました（静岡県調査）。地域別に見ると、住宅被害が集中した県中西部よりも、静岡市内における負傷者数が多いことが一つの特徴といえます（図2）。負傷の原因は、1）落下物などにあたった、2）転んだ・ぶつけた、3）ガラスで切った、が上位3つの理由となっており、過去の地震災害時のけがの原因と同じ傾向を示しています。

地震後、静岡県内の各地域で、家具の固定に関する調査を実施しましたが、いずれの地域に

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

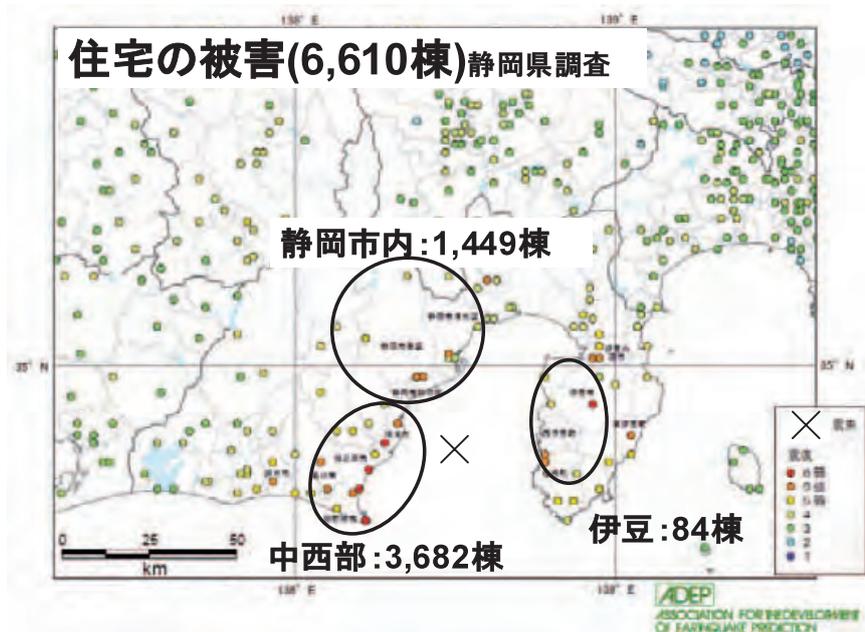


図1 2009年駿河湾地震住宅被害

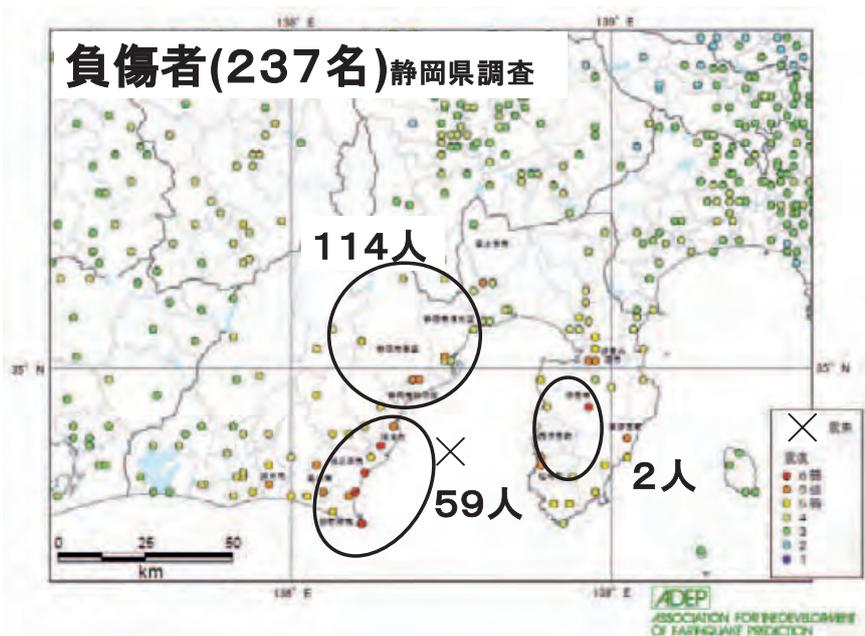


図2 2009年駿河湾地震負傷者

おいても「殆どの家具を固定している」と「倒れると危なそうな一部の家具は固定している」をあわせると、約6割が何らかの固定対策を実施していることが明らかとなりました(図3)。この数字は、他県に比べるとかなり高い数字といえますが、ケガの防止は、家具の転倒防止策だけでなく、その他の落下物を防止すること、また揺れている最中に慌てて動き回らないことが重要であることが、改めて確認される結果となりました。

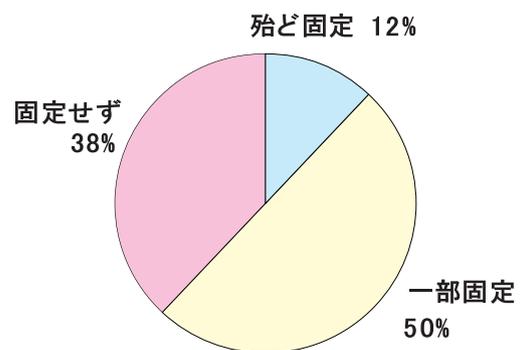


図3 家具の固定状況(静岡県内)

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

また幸いなことに多くの負傷者は軽傷でしたが、中には、

- ・地震に驚き2階から飛び降り両足踵を骨折
- ・階段を踏みはずし、肋骨骨折
- ・避難中に1階屋根より足を滑らせ地表に落ちて腰部骨折
- ・慌てて飛び起きアキレス腱断裂
- ・鉄パイプに足の指をぶつけ骨折
- ・机の下にもぐろうとして骨折
- ・柱に腰を強打し尻もちをついて腰椎圧迫骨折等の重傷を負った方もおり、このようなケガをしてしまうと、その後自力での避難は困難となりますし、ましてや地域コミュニティでの防災活動の戦力として活動することは不可能となってしまいます。

一方、本地震では「やけど」による負傷者が発生しなかったことが、これまでの地震とは異なる結果となりました。これは、地震発生が8月11日午前5時7分であり、家庭での火気使用率が非常に低かったことが原因していると思われれます。

3 地域での助け合い

静岡県内の市町村では、地域で発生した被害状況を、自主防災組織などの地域コミュニティが把握し、その情報を市町村の災害対策本部に伝える取り決めをしているところがあり、駿河湾地震の際には、地元住民から組織的に被害情報の提供が行われていた例が複数の自治体で見られました。一方、このたびの地震は最大震度が6弱であり、幸いにも地域コミュニティが機能できたために、日頃の訓練どおりに事が運んだのではないかという見方もあります。本番の東海地震で予測されているように、震度6強から震度7の揺れが数分間続くような地震が起こったら、計画どおりには行かない面も起こって

くる可能性は十分に考えられます。しかし重要なのは、住民が自ら、自分たちの住む地域で発生した被害を把握し、その情報を市町村に伝えるという役割を認識している点にあると思います。

地震発生後、静岡県焼津市では市民に対するアンケート調査を実施しました。その中で、「駿河湾地震を経験し今後必要だと思う地域での助け合い」について、以下の結果が出ています（図4）。

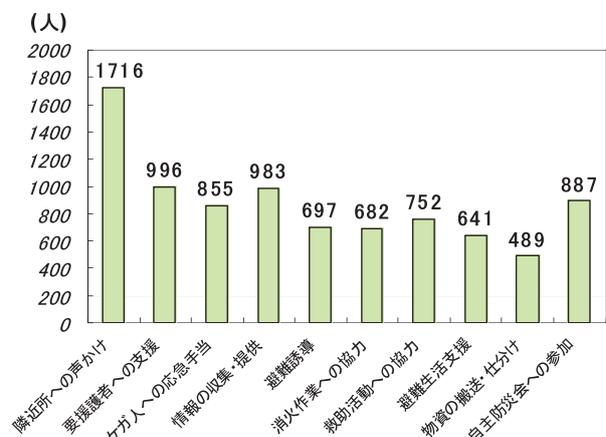


図4 必要だと思う地域での助け合い(焼津市調査)

最も多かったのは「隣近所への声かけ」であり、次いで「要援護者への支援」となっています。災害が起こったときには、まず自分の身をまもり、そして向こう三軒両隣に声をかけ合い安否を確認し、支援が必要な人たちがいたら協力して助けることの重要性を指摘する方が多かったことが分かります。決して難しいことではなく、日頃から地域住民が持つべき当たり前の共助の精神を培っておくことが、来るべき東海地震に備えて最も重要な対策であることを、私たち静岡に暮らす住民が再認識した駿河湾地震でした。